

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：32515

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26370171

研究課題名（和文）政治報道に関する新聞マンガの役割—横山泰三『社会戯評』が描いたもの—

研究課題名（英文）The part of editorial cartoons in political coverage

研究代表者

茨木 正治（Ibaragi, Masaharu）

東京情報大学・総合情報学部・教授

研究者番号：10247463

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、人物によらない新聞1コマ漫画「社会戯評」が描く、政治疑獄事件（「造船疑獄」「黒い霧事件」「佐川急便事件」）の描写を分析し、人物偏重の政治画像報道を見直すものである。研究の目的として、1「社会戯評」の特徴の変化を裏付ける「メディア環境の考察」、2「社会戯評」の政治諷刺画としての役割を検討する「メッセージ内容の考察」、3「社会戯評」が読み手や社会に与えた影響を探る「メディアとしての「社会戯評」の検討」の3点を設定した。また、上記1と2の前提となる作業として、平成26年度からの継続した、「社会戯評」スキャニング作業を行い、1980年10月から1992年12月（掲載最終日）まで完了させた。

研究成果の概要（英文）：This study is aimed to criticize characterized-biased coverage approach through an content-analysis of non-characterized editorial cartoon "Shakai Gihyo". The points are to be discussed about 1 the media("Shakai Gihyo) environments analysis, 2 the message content analysis, 3the media effects. In effect editorial(satirical) cartoons have attends more importance on cognition process(what conveys and what associates with readers on political cartoons) than attitude process (what causes people to laugh).

研究分野：マス・メディア研究

キーワード：諷刺漫画 社会戯評 横山泰三 新聞 諷刺 フレーム 笑い 雑誌

### 1. 研究開始当初の背景

政治における図像研究は、選挙ポスター研究が今世紀に入ってからであり、言説研究に関しても、1980年代からの諸研究は文字と演説に関する研究であり、図像解釈にまで拡張した研究は茨木(1997)の研究以外ほとんどない。茨木は予備調査から以下の知見を得た。

(1)「社会戯評」で横山泰三は、政治風刺(「政治漫画」)と世相風刺(「世相諷刺画」)を主眼とする漫画を描き分けていた。

(2)「政治漫画」は、掲載媒体の影響を受ける(掲載面、掲載機会の増減、テーマ)が、主張の根拠については、掲載媒体のテキストに依存するとまでは言えない。

(3)戦後のいくつかの贈収賄事件において、「社会戯評」は民衆の責任という独自の視点を有していた。

### 2. 研究の目的

本研究では、人物によらない新聞1コマ漫画「社会戯評」が描く、政治疑獄事件(「造船疑獄」「黒い霧事件」「佐川急便事件」)の描写を分析し、人物偏重の政治画像報道を見直す。画像・映像による政治報道は映像メディアの発達により、人物に関する情報が優先される傾向が昨今強まっている。肖像画を源とする『政治漫画』ではあるが、1954年から1992年まで掲載された「社会戯評」は、人物優位の「疑獄事件」の責任を脱して、「贈収賄」構造にまで言及した。このことを、作品そのものと作品のメディア環境とを鑑みて実証する。

本研究は、画像に加えてテレビ映像での政治報道、さらには文化・社会領域の報道の分析、逆に政策重視の政治の他領域の報道の分析にも、それぞれ展開が可能である。

### 3. 研究の方法

本研究の目的は、人物によらない新聞1コマ漫画「社会戯評」が描く、政治疑獄事件(「造船疑獄」「黒い霧事件」「佐川急便事件」)の描写を分析し、人物偏重の政治画像報道を見直すことにある。研究計画の進め方として、以下のように実施する。

(1)「社会戯評」の「政治漫画」としての特徴を明らかにするために、以下のことを行った。

連載期間中の全作品の内容分析を行う(メッセージ内容の考察)。

作者横山泰三の漫画史的位置を、終戦直後の「第1次諷刺雑誌ブーム」時の作品ないし他の諷刺漫画と比較する(メディア環境の考察1)。

(2)上記の政治疑獄事件に関連する、新聞・雑誌掲載マンガおよび記事・論説・コラム・投稿を抽出し、テーマ設定とその視点、修辞技法を中心に「社会戯評」と比較する(メディア環境の考察2)。

(3)「社会戯評」が読み手や社会に与えた影響を探る(メディアとしての「社会戯評」の検討)。

### 4. 研究成果

(1)「社会戯評」のデータ化(資料保存)

本研究は、人物によらない新聞1コマ漫画「社会戯評」が描く、政治疑獄事件(「造船疑獄」「黒い霧事件」「佐川急便事件」)の描写を分析し、人物偏重の政治画像報道を見直すものである。また、上記研究の目的の前提となる作業として、2014年から2016年8月まで「社会戯評」のデータ化作業を行い、1965年から1980年10月までを完了させた。この作業は、「社会戯評」13561点すべてに、見出しを付記し、その後スキャニング作業を行った。

(2)「疑獄事件」における政治諷刺画の分析と諷刺概念の一般化

(1)のデータ化された資料をもとに、1954年の「造船疑獄」を扱った「社会戯評」について、内容分析を行い、諷刺概念の重要な要素である当時の社会規範と事件の逸脱性との関係を顕在化しようとした。「社会戯評」の諷刺性を検証するために、諷刺研究をユーモア研究からの接近方法に関する文献を収集し、そこから、諷刺と社会規範との関係を見出した。さらには、諷刺概念を社会規範との関係としてとらえる理解を文

芸作品や諷刺研究の蓄積から抽出し、その実証化を「社会戯評」の諸作品の分析によって試みた。

### (3)「漫画化」あるいは「メディア化」概念の考察

人物によらない政治諷刺表現には、どのような属性がみられるのか。この問いに対して、諷刺画間の比較をするだけでなく、「メディア化」や「漫画化」によって登場人物の描かれ方に変化がみられることから明らかにしようとした。「メディア化」とは、漫画作品が映画、テレビ（アニメを含む）舞台等ほかのメディアによって表現されることを、「漫画化」はその逆の流れで「漫画」として表現されたものをさすと規定し、それらの関係を、メディア間の「変換」過程ととらえ、それに伴うメディア属性の変化を探った。「社会戯評」のような諷刺コマ漫画よりも、ストーリーマンガにおける「メディア化」あるいは「漫画化」の傾向が高いことは想定されたが、それらの一般化については課題として残された。

### (4)検閲・規制からみた掲載媒体との属性関係

さらに、諷刺画掲載媒体の特徴とそこからの諷刺画の位置づけを探るにあたり、「漫画化」に関連して考察したものに加えて、メディア史の知見から、新聞、雑誌がどのような属性を持って成立してきたのか、またそこに存在する政府や権力のメディア規制に関する試みの歴史を辿ることによって明らかになったものをいくつかまとめた。検閲や規制の対象となることは、当局にとって好ましからざるものという認識をもつほど、世間一般に認知されていたことの証左となりうるからである。しかしこれも、実証化までには多くの課題があり、発想の利用にとどまった。

### (5)フレーム概念の利用による社会規範の抽出

認知枠が態度や行動を規定するという、認知科学の知見から導き出されたフレーム、スキーマ概念は、社会学やメディア研究の知見と複合され（あるいは混合され）広く適用可能な概念になっている。このフレー

ムを用いた研究は主に言説に関するものであった。しかし、画像に援用した研究もわずかに存在する。本研究では、それらの先行研究をもとにして、政治漫画の描き手の認知枠を修辞技法から推定し、さらには、掲載媒体の記事や論説との照合をすることで、送り手のフレームとみなすことにした。そのフレームが導く社会規範（とその逸脱）が諷刺を構成する要件となりうることで、現状では特定事例に限定されるけれども、見出された。ここから、「メディアとしての「社会戯評」が読み手や社会に与えた影響」についても、受け手が送り手のどのようなフレームを享受した（しなかった）か、を諷刺画において探ることがある程度可能になった。

諷刺を構成する逸脱対象となる社会規範がどのように形成されているかを探るときに、その焦点を、諷刺漫画が主題を決める題材を提供するメディア報道に求めた。週刊誌は本文の要約からは推定できない見出しが多くみられるといわれる。そこで、どのような認知枠組み（フレーム）を内包しているかを関心の焦点とした。このフレームは、特定争点の語られ方から探ることで明らかになることがわかった。このように主たる対象として、新聞・雑誌記事のフレーム分析を本研究の準備段階として行い、当該見出しに埋め込まれる認知枠組みを見出すことができた。それをもとに、諷刺画の修辞技法と照らし合わせて、諷刺画像の読み取りを精緻化した。

### (6)諷刺性の比較

また、活字媒体の記事や論説にみられる諷刺性と「社会戯評」のような諷刺画の諷刺性の比較だけでなく、笑いやユーモアといった諷刺の効果からの接近も併せて行って、諷刺画の諷刺性の実態に迫ろうとした。つまり、諷刺やユーモアをそもそもの目的とする活字表現でかつ掲載媒体に属するものを比較の対象にした。時事川柳の類がそれである。「時事諷刺川柳」との比較を、そこに現れるフレームに着目して分析をした。特にテーマ設定の技法において、時事内容を想起させる表現と文化指標（芸能、スポーツ、文芸、学術等々）との関係から、主題を決める時事内容のどの部分が強調され

るのかを個別事例をもとに検討した。どのように読み手を笑わせるかではなく、その前にある、「何を伝えて、何を連想させるか」をもとに諷刺素材の検討を試みた。前述した読み手（読者）への影響は、「時事川柳」という読者投稿作品を対象としたとことでメディアにおける受け手のもつ諷刺への認識をまず把握しようとした。そして、送り手の側から見た機能や属性としては、前述したところで反映されている。それゆえ、メディア研究におけるフレーム概念の導入によって、受け手が送り手のどのようなフレームを享受した（しなかった）か、を時事川柳と諷刺画において比較参照しつつ探った。

時事川柳を対象とすることから、さらなる展開が見出された。明治から戦前の昭和時代に発刊された『大阪パック』における「時事絵川柳」である。これを求めることによって、漫画における画と文の関係の歴史を一步進める契機となりうると予想された。宮本（2005）が述べたような流れの後を辿ることが「時事絵川柳」とその時代を探ることで少し見出せるのではないか。戯作者と絵師の共同作業であったポンチ画が、明治中期に視覚的要素の優位性の進展を招き衰退しヴィジュアルとしての漫画が形成されるが、明治後期の『大阪パック』の「時事絵川柳」の位置づけを、江戸期の遺産ととらえるか、新しい諷刺画の類型と見るかで議論の余地が生じてこよう。

#### 引用文献

宮本 大、「ポンチ」から「漫画」へ ジャーナリズムと「美術」の間で表現を磨く、宮地正人、佐々木隆、木下直之（編）『ビジュアル・ワイド 明治時代館』所収、2005、390 - 391  
茨木 正治、「政治漫画」の政治分析、芦書房、1997

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

茨木正治、情報社会における政治と諷刺、法政論叢、査読有、第53巻第1号、2017年2月、101頁 - 114頁  
茨木正治、日本と欧米の諷刺漫画にみる

この100年の社会(学)、社会学論叢、査読有、第182号、2015年3月、55頁-78頁

〔学会発表〕（計9件）

茨木正治、現代社会における諷刺「安倍政権」に関する「政治漫画」の分析をもとに、日本社会学会第89回大会、2016年10月8日、九州大学伊都キャンパス(福岡県福岡市)

茨木正治、諷刺画に見る笑い 新聞1コマ諷刺漫画を手掛かりに、日本笑い学会第23回大会、2016年7月17日、関西大学堺キャンパス（大阪府堺市）

茨木正治(司会兼報告)、メディア内容の価値・規範の形成過程 マンガ・アニメを手がかりとして、日本マス・コミュニケーション学会2016年度春季研究発表会ワークショップ7、2016年6月19日、東京大学本郷キャンパス(東京都文京区)

茨木正治、情報社会における政治と諷刺、日本法政学会第124回大会/2016年6月19日、日本大学法学部(東京都千代田区)

茨木正治、「諷刺と政治」政治マンガ研究再考、政治マンガ(政治カートゥーン)研究会、2016年3月19日、明治大学和泉キャンパス M611 教室（東京都渋谷区）

茨木正治、「諷刺の精神」新聞諷刺画にみる、日本英文学会関西支部第10回大会シンポジウム「諷刺の精神」、2015年12月20日、武庫川女子大学中央キャンパス文学2号館 L2-11(兵庫県西宮市)

茨木正治、「漫画とはどういうメディアか？」「漫画化」、漫画の「メディア化」を手掛かりに、日本社会学会第88回大会、2015年9月19日、早稲田大学戸山キャンパス 34号館 452教室（東京都新宿区）

茨木正治、「マンガ研究とメディア研究」、日本マス・コミュニケーション学会2015年度春季研究発表会ワークショップ3「マンガ研究とメディア研究」「漫画化」を手掛かりに、2015年6月14日/同志社大学今出川校地（新町キャンパス）Z26教室（京都府京都市）

茨木正治、新聞マンガにおける政治と社

会 横山泰三『社会戯評』を中心として、日本社会学会第87回大会、2014年11月22日 / 神戸大学 (兵庫県神戸市)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

茨木 正治 (IBARAGI Masaharu)

東京情報大学・総合情報学部・教授

研究者番号: 10247463